別紙１－１

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※　甲　　第　　号

氏　　名　　四辻　伸吾

論　文　題　目

小学校における包括的自己成長プログラムの開発

- いじめ問題をはじめとする心理的諸課題へのアプローチ -

論文審査担当者

主　査　　名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授　松本真理子

名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授　平石賢二

名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授　中谷素之

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

別紙１－２

本研究は，わが国の教育現場における心理的諸課題に対応するための「包括的自己成長プログラム」を開発することを目的とするものである。

第１章においては，本論文における問題と目的を述べた。わが国の教育現場の現状をふまえ，汎用的で包括的な教育プログラムの構築がのぞまれることについて論じた。

第 2 章では「小学校における自己成長プログラムに関する文献展望」を行った。「日本のいじめ予防・防止プログラム」及び「心理的諸課題へのアプローチとなるプログラム」に着目し，わが国の先行研究について，「統計的効果検証の有無」及び「学習指導要領上の教科・領域の学習内容との整合性」の２点で分析を行った。この結果，日本の「いじめ予防･防止プログラム」及び「心理的諸課題へのアプローチとなるプログラム」の先行研究においては，「統計的効果検証」及び「学習指導要領上の教科・領域の学習内容との整合性」が十分ではないことが示唆された。

第 3 章では心理的諸課題測定の尺度開発を行った。第 1 節では，小学生が「いじめ」に対してどのような考え方を持っているかを捉える尺度として，「いじめ一定理解」「いじめ鋭敏感覚」「いじめ解決可能」の３因子からなる「小学生いじめ観尺度」を作成した。第２節では，小学生が自分を成長させたいという意欲について把握する尺度として，「社会性スキル成長意欲」，「学習性スキル成長意欲」の 2 因子からなる「小学校高学年児童自己成長意欲尺度」の作成を行った。第 3 節では，小学生が学級集団の中でどのように生活していきたいのかについて把握する尺度として，「他者重視」「担任重視」，「一人重視」「楽しさ重視」「親友重視」の 5 因子からなる「小学生学級生活志向性尺度」を作成した。第 4 節では「小学生いじめ観」「小学校高学年児童自己成長意欲」「小学生学級生活志向性」「自尊感情」「学校生活満足度」「学校生活意欲」の関連を検討したところ，「いじめ解決可能」には，「他者重視」からの有意な正のパス，「いじめ一定理解」には，「自分重視」「楽しさ重視」からの有意な正のパスが見られるなど関連が見られることが示唆された。

以上の基礎研究をふまえ，第 4 章では心理的諸課題の解決を目指した実践研究を行った。第１節では，本研究が着目する視点にアプローチした実践研究について概観し，第２節から第５節まで６つの実践について検証した。

第２節では，道徳において，「いじめ」への直接的及び間接的アプローチが「いじめ観」や関連要因に対する効果について検証した。「いじめ鋭敏感覚」「いじめ解決可能」「学習性スキル成長意欲」「先生重視」において有意な上昇，「いじめ一定理解」において有意な下降，「学習性スキル自己成長意欲」と「親友重視」に有意な上昇が見られた。

第３節では自尊感情の向上を目指した実践研究として，「構成的グループエンカウンターとソーシャルスキルトレーニングの実践」，総合的な学習の時間にて行った「良いところ見つけ」の実践，特別活動において行った「良いところ見つけ」の実践を行った。いずれも児童の自尊感情は取り組み前に比べて，取り組み後に有意に高まっていた。

第４節は，教科学習における学習意欲の向上を目指した実践研究として，意見発表促

進活動の取り組みを行った。その結果，実験群の学級ではスクール・モラール尺度の「級友との関係」，「学習意欲」因子も有意に高まっていた

第 5 節は，心理的諸課題へのアプローチとなる実践研究として，総合的な学習の時間における探究的な活動を行った。この結果，「自分重視」「他者重視」「先生重視」の得点が高い児童は「いじめ鋭敏感覚」が有意に下降し，「他者重視」「自分重視」「先生重視」の得点が低い児童は「いじめ鋭敏感覚」の得点の有意な変化はなかった。アプローチにより「他者重視」「自分重視」「先生重視」の得点が低い児童は「いじめ鋭敏感覚」が維持されるという可能性が示唆された。

第 5 章では「包括的自己成長プログラムの構築」を行うとともに，今後の課題について論じた。第 1 節では，（1）「心理的諸課題についての包括的アプローチであること」，（2）「効果が検証されたユニットから構成される長期的なプログラムであること」，（3）「学習指導要領と合致していること」という 3 つの視点をふまえて，教育現場において広く活用することができる「包括的自己成長プログラム」を開発した。第 2 節は，「包括的自己成長プログラム」をもとに，学習指導要領をふまえた年間を通したカリキュラムを開発した。第 3 節では，「包括的自己成長プログラム」の今後の課題について論じた。我が国の教育現場においては，今後も新たな課題が発生していく可能性がある。これをふまえて本研究で提案した「包括的自己成長プログラム」は，新たな問題の発生にも対応できるような柔軟なプログラムにしておく必要があると考えられる。

第 6 章では，各章で得られた知見をまとめ，社会環境の変化も大きく、今後の教育現場で求められるもの，文部科学省研究開発学校の動向から窺うことができる今後の学習指導要領の方向性をふまえ，本研究で得られた知見の意義を論じた。

本論文の特色は，教育現場で活用できる新たなプログラムについて以下の 3 つの視点をふまえて構築したことである。この 3 つの視点とは（1）「いじめ問題をはじめとする現代の教育現場における心理的諸課題について包括的にアプローチできるものであること」，（2）「効果が検証された小さなユニットから構成される長期的なプログラムであること」，（3）「学習指導要領の内容と合致していること」である。教育現場で行われている従来の教育プログラムは，実践者である教師により，様々な創意工夫がなされているものの，汎用性や実際の効果についても十分でないものが散見される。本論文では，今後の教育現場の流れをふまえて，心理的諸問題の解決へと向かうことができる心理教育プログラムの開発という点で教育現場に大きく貢献するものである。

本論文に対して、審査委員は慎重に審議を行い、内容に関して次のような指摘がなされた。(1) 論文全体を通して、心理学領域における理論的背景や諸概念に関す

る検討が十分とは言えないのではないか、(2) いじめ予防アプローチに関しては「集団」と同時に「個別性」をどう扱うのか、あるいは個へのアプローチの視点が重要なのではないか、(3) 各プログラムの継続的な実践検証が行われていないことは限界ではないか、(4) 学習指導要領との整合性を強調しているが、各教科における展開のなかで、どう位置付けることを「整合性」ととらえているのか曖昧である、(5) 全体にデータ分析についてさらに多面的に分析できる余地があるのではないか、(6) 探索的学習とは、具体的に何を目的として展開した学習であるのかについて記述が曖昧ではないか。

学位申請者は、これらの問題点や今後の課題についても十分に認識しており、審査員からの指摘や質問に対しても適切かつ誠実な応答が行われた。上記のような課題があるものの、本論文は教育現場の問題に根差した視点による、精力的な実践研究論文であり、わが国の小学校における心理的諸課題に対する解決の一つの方向性を示したものとして高く評価できるものと判断した。

よって、審査委員は全員一致して、本論文を博士（心理学）の学位に値するものと判断し、論文審査の結果を「可」と判定した。